風の末裔シリーズ・１st シーズンの３

～蒼と赤～

泥のような黒い雲が、低く、とぐろを巻いて、ゆっくりうねっている。
雲と空のギリギリの隙間に、蒼の妖精の子供が駆る草の馬。雲を出たり入ったりしながら大きくジグザグに飛んでいる。しかしヒタリと後ろを追走する大鴉(おおがらす)を振り切れない。
「ち…！」
舌打ちしながら進路を変えて、雲に入って上を目指す。しかし大鴉は巨大な翼を翻して余裕で急上昇し、雲の上に先回りしていた。
「どうしよう…」
このままじゃ本陣に帰れない。妖精は、ためらいながら剣の柄に指をかけた。
雲が大きく乱れて、炎をまとった狼が飛び出して来た。剃刀みたいな牙と爪が、あっと言う間に鴉を引き裂き、あたりに飛び散る黒い羽根だけの存在にしてしまった。
「なめられてんじゃねえよ！　どチビ!!」
「……ゴメン…」
赤い狼は、自分と対をなす蒼の狼の名が気にくわなくて、『どチビ』とか『ちっこいの』としか呼ばない。
テムジンは間を取って『小狼(シャオラ)』と呼んでくれた。響きで言うと、この名前は結構好きだ。まあ、あんな小兵を振り切れないんじゃ、まだまだ蒼の狼は名乗れない。
モンゴルの平定は比較的早かった。
元々混沌としていたし、人も人外も戦の収束を求めていた。特に人外の者を味方に出来た事は大きかった。何が出て来てもテムジンは物怖じしなかったし、粗野な者には赤い狼が睨みを効かせ、理性的な者には蒼の妖精が話をつけた。
そう、人の戦争にも、人外の者の影響は大きい。
それを読み切った少年が最速で若い王(ハーン)に駆け上がれたのは、当然至極だったのかもしれない。
しかし、モンゴルを出ると事情が違った。統治よりも征服色が濃くなると、人外の者の反感も買う。小狼が何とか駆け回っても、モンゴル国内程は役立てなくなってきた。
何よりそこまで来ると、同じレベルの人間が出てくる。大陸の大国に、当然のように人外に通じている将軍がいた。敵の布陣を調べに行った筈が、危うく敵の手に堕ちる所だった。
「ダメだなぁ…」

本陣は崖を背にした河の側に張られていた。草の馬は、王のパオの横の小さなパオの前に降りた。
草の馬が見えない新人の兵士と古株の兵士がのんびり会話をしている。
「ああ、殿はいつも陣を張る時は、御自分のパオの横に無人の小さなパオを張らせるのさ。戦神(いくさがみ)を住まわせているってさ」
「縁起担ぎですか。豪胆な王とイメージが違いますね」
そんな会話の横をすり抜けて、小狼は王のパオへ急いだ。偵察して来た事を早く報告しなくっちゃ。
パオの二重の御簾をくぐって、妖精の娘は凍りついて止まった。そして白い顔を林檎みたいに真っ赤にして、風より早くその場を立ち去った。
「今、入り口の布が動いたような…」
「……風だよ…」

崖と河の間に小さな森がある。小狼は戦の陣の雰囲気を抜け出したくなると、こういう所へ来る。
低い枝が重なってハンモックのようになったお気に入りの場所で、うつ伏せで手足をぶらぶらさせていた。

「おーい…」
呑気な声がする。背が伸びて、王となって、父親になっても、このヒトの本質的な所は何にも変わらない…。
「軍議だよ〜、作戦パオに来て〜」
「……」
「ん〜? どした? ご機嫌斜め?」
「……今日、奥方が来られる日だとは知りませんでした」
「ちっちっ、あれは奥方じゃなくて! 奥さんにナイショの方のヒト♪ いい加減、俺の奥さんの顔くらい覚えてよ」
「あんなに一杯居たんじゃ覚え切れません!!」
「しょーがないじゃん! 子供一杯欲しいもん! 俺の代だけじゃ無理だもん、世界征服!」
「……」
このヒトは何処まで本気で、何処からが冗談なのか分からない…。でもそんなヒトに着いて行こうと決めたのは自分だ。
最初は、自分の大好きな大地を、戦の無い平和な地に平定して欲しいって理由だった。本国を出た今は、その流れでここに居るだけで、自分の元々の目的も、希薄になりつつある。
「ただこのヒトを守りたい、という理由だけなら、赤い狼がいれば充分だもんね…」

小狼は小さく息を吐いて、テムジンの後に続いた。

大きな丸机を囲んで、難しい顔をした面々が額を付き合わせている。

机の上には、墨で乱雑に書かれたこのあたりの地形図と、布陣を表す駒。係が王の言う通りに駒を並べて行く。

「ん、後ここと…ここ、…そんで、敵の本陣はここで、…こっちに別働隊」

臣下達は、何故この若い王が、居ながらにして敵の布陣を手に取るように把握しているのか、今更、聞かない。

いつもの事だし、間違っていた事もない。余程優秀な間者を持っているか、さもなければ本当に戦神が付いているのだろう。

目に見えない妖精が机に腰掛けて、指を差して教えているなんて、夢々思わない。

鴉(からす)の事を思い出して指が震えた妖精は、駒の一つをカタリと倒してしまった。

一同ギクリとなる。

「ん？　んん～？　そこがどうかしたの？」

王は何でもないように呑気に聞いた。

「ああ、鴉将(ウァージャン)がいるから気をつけろって事か…

嫌だよね、あのヒト。鴉使うし…」
独り言のように呟きながら、王は手元の駒をくるくる回した。こんな時、この人には本当に戦神が付いているのかもしれない…と、一同は思うのだった。

一通りの情報提供が済めば、後は王と臣下達の作戦会議だ。小狼には用はない。
妖精の娘は、さっさとパオを抜け出し、森に向かった。ところが、定位置のハンモックは赤い狼が占拠していた。
小狼は唾を呑み込んだ。何年行動を共にしていても彼は苦手だ。でも、言うべき事だけはちゃんと言わなきゃ。
「あの…」
例の色の薄い三白眼が、妖精の娘を、ぎろりとねめつける。
「さっきは有難う、助けてくれて…」
「別に…」
赤い狼は芯から面倒くさそうに吐き捨てた。言うべき事は言った、もういいや…と、小狼はきびすを返した。
「お前さぁ…」狼が妖精に自分から声かけるのは珍しい。
「向いてないぜぇ…、戦場」
そして、そんな時は、ろくでもない事しか言われない。
「…!!……ワタシも、そう思います!」
そう一言返して、自分のパオに駆け戻った。
分かってるわよ! ばかぁ!

今度は自分のベッドにうつ伏せて、またふてくされ姿勢をとった。最近、こんな事ばかり。
御簾が開いて、無神経その一が顔を出した。
「饅頭、食う?」
「軍議は、いいんですかっ?」
「終わったよ、今日明日ではどうもならんな、…膠着状態。また、二、三日後に偵察を頼む事になると思う」
「…わかりました…」
「……」
「まだ、何か?」
「だから、饅頭…」
「いりません!!」
若い王は心底困り顔をした。こういう顔が昔から変わらないのはズルい。
「……いただきます…」
後で食べるから置いて行って下さい、と言う前に、テムジン

は嬉しそうにベッドの隣にちゃっかり座り、大きな饅頭を一つ取り出し、半分に割った。
「はい、おっきい方！」
こうして二人で腰掛けて饅頭なんか食べていると、難しい事なんか考えないで、ただこのヒトの側に居たいから居る…で、いいんじゃないかな？　と思えてくる。
「今日の女性(ヒト)がさぁ」
小狼は饅頭をむせた。前言撤回！　この無神経！
「土産がこれ！　戦場の陣中見舞いが…！　子供か？ってのの？」
「殿が甘党だってご存知だったのでしょう。では、ワタシが頂いてしまって、申し訳なかったですね」
「険があるねぇ。ん？　ん・ん・ん？……ヤキモチ？　ほおほお・・・」
「――!!!」
小狼は枕を振り上げて立ち上がった。テムジンはひらりと小机を飛び越して、出口に立った。
「だって、しょーがないじゃん！　お前、いつまでたっても子供なんだもん」
そして枕が飛んでくる前に、御簾の向こうに姿を消した。
…と思ったら、もう一度顔だけ出して、「鼻の頭、あんこ♪」
今度こそ枕が飛んで来た。
テムジンがパオに戻ると、珍しく赤い狼が敷物の上に寝そべっていた。
「ばぁか…」
「ほっとけよ」
「ホントにばぁか…」
「だって…いつまでたっても子供なんだもん…」
さっきと同じセリフを、王は、今度は口の中で小さく繰り返した。
「妖精ってあんなに成長が遅いもんなんか？」
上物の穀物酒を、狼用の口の広い器に注ぎながら、テムジンが聞いた。
「さあな、種族にもよるけれど、あいつ、初めて逢った時からほとんど変わらんなぁ。蒼の妖精はそこまで長命じゃないと思うんだがな…」
「何でだと思う？　もしかして、彼らの里でないと、成長出来ないとか？」
「知るか…」
「……」

困り顔のテムジンに弱いのは小狼だけではない。赤い狼も、ふん！　と言って立ち去る事が出来なかった。
「里は関係ないと思うぜ。まあ…ムラがあるんじゃないか？　そういう成長の仕方をする妖精も、稀にはいるらしいぜ」
「？　どういう事？」
「必要に応じて成長するって事さ、早く大人になる必要のある奴は早い」
「じゃあ、小狼は？」
「大人になりたくないんじゃないか？」
「……」
「それより、あいつ、今日ヤバかった事、話したか？」
「何？　それ？」
「敵の陰陽師の放った大鴉に危うくやられる所だった。剣を抜くのにためらいがあり過ぎるんだ。……なあ、やっぱあいつ、戦場に向かないぜ」
「……」

＊＊＊

小狼(シャオラ)はベッドに伏せて身じろぎもしなかった。
本当、何で自分はいつまでたっても子供なんだろう。確かに蒼の一族は成長に個人差がある。
「兄様は大人になるの、早かったなあ…」
今の蒼の里の長、彼女の兄は、偉大な父親の後を引き継ぐ責任感で、小さい頃から、勉学も修練も寝ないでやっていた。
父親に着いて修行するようになったら、もうワタシなんか追い付けないような遠くへ行ってしまった。
そんな事を感じている間に、同い年の子もどんどん成長して、自分はどんどんチビの味噌っカスになっていった。それでも、ここ何年かの全然成長しない状態よりはマシだった。
ワタシ、ずうっとこうなのかなあ…？　ここには相談出来るヒトもいない……。
彼と思いを違える日が来たら、帰って来るのです、兄様はそう言ってくれた。思いが違えている状態にはあるのかもしれない。でも、兄様に頂いた名前もまだ名乗れないで、どの面下げて帰れるだろう。しかも全然成長していない姿で。
「はあ～あ……」
せめて偵察位はきっちり出来るよう、今は寝ておこう。
「こういう手はどうだ」
こっちは眠れない面々だ。
「蒼の長に手紙を書くんだ」

赤い狼は、自分でも不思議なくらい、真剣に考えている。
「それをどチビに届けさせる。あんたから緊急の用事ってな」
「それで？」
「中は告げロオンパレードでいい。今日の鴉の一件とか、トルキアの平原で大牛に囲まれた事とか」
「そんな事もあったのか？」
「……まあ、そういう手紙を読んで、長がどチビを帰す気になるか？　…って事だ」
「…・・いい手だけど・・パス」
「なんで？」
「小狼は側に置いておきたい、離れるのは嫌だ」
「・・・!!　じゃあ、とっとと側室にしちまえ!!　ガキでも構うな!!」
「そんな事出来るか!!あいつはそんなんじゃないんだ!!」
赤い狼は呆れていた。こんな阿呆な議論に、息切れしながら真剣に付き合っている自分に、心底呆れていた!!
「側室？　…側室……そうだ！」
「何か思い付いたか？」
眠気を通り越してハイになった脳味噌が考え付くのは、ろくな事じゃない……。

数日後……。
「ご用は偵察ではなかったのですか？」
「うん！　偵察は赤い狼にやって貰う事にしたから！」
「そんな…やはりワタシでは至りませんか？」
「ううん、違うの違うの！　小狼にはもっと大事な任務が出来たの。小狼にしか出来ない任務！」
「そうですか。何でしょう？」
「俺の新しい側室さんが、ここに顔見せに来んの。そんでね、護衛してあげて欲しいの。こんな事、小狼にしか頼めないから。いや～、小狼がいてくれて良かったなあ～」
妖精の娘の額に縦線が入り、空気がピシッとひび割れる音がした。
上空で赤い狼が八の字に滅茶苦茶飛び回りながら叫んでいる。
「「阿呆ぅ～～～!!」
＊＊＊
小狼だって、最初からテムジンにこんな複雑な気持ちはなかった。好き、護りたい、そんな単純な気持ちで彼の元に参じたのだ。
何せテムジンと行動を共にして、最初の闘いは、捕らわれの彼の妻を取り戻す事だった。

「妻帯者だったのぉ?!」
「ちっちゃい頃、親が決めた許嫁(いいなづけ)。だけど、俺にとっては、残り少ない大切な家族なんだ」
そんな彼の物言いに共感して、小狼も力を尽くした。
無事取り戻した彼女を正室とし、統治事業はトントン進み、世継ぎに恵まれ、その頃のテムジンは順風その物だった。
妃には、蒼の妖精や赤い狼は見えなかったけれど、自分の夫が何か人知を越えたモノに護られているのは理解して、彼女なりの信仰で感謝を表した。
小狼は彼女に対して特別な感情はない。テムジンの幸福に彼女が不可欠なら、彼女にも健やかでいて欲しい… そんな感じに思っていた。
揺らぎが見えたのは、跡取りとなるべき男の子が生まれた後だ。
正室に子供が生まれる度に、小狼はこっそり引き合わされた。そして、幼子が小狼を見る事が出来ない…勇者イェスゲィの資質を受け継いでいない…という事が分かると、テムジンは少なからず落胆するのだった。
小狼は、それでいい、と思った。突出した勇者なんかでなくていい。世界征服はともかく、平和を維持出来る普通の跡取りになってくれれば…
しかし、テムジンは違う考えだった。
思えば、テムジンがやたら側室を集めだしたのは、三番目の男の子も蒼の妖精が見えない…と、分かった頃だ。
表向きには、自分の跡を継ぐのは正室の息子達でいい。しかし世界に覇権を広げるには、絶対イェスゲィの能力を持つ者が必要だ。
正室は忠実に、どんどん大きくなる後宮の世話と管理をした。この時代の権力者が血縁を広げるのは当然の事。
小狼は一抹の危うさを感じたが、テムジンは家族を皆それなりに大切にしたので、何も言わなかった。

そして陣中。
先日平伏して来た高原の小さな氏族に、急遽側女(そばめ)を差し出せって言い出したのだ。この無茶な王様は。
赤い狼は上空を旋回しながら、歯をガリガリ咬み鳴らした。しかも、どチビに、女の護衛任務に専念させ、戦場へやらない為に…だ!
「なんって! まどろっこしいんだ!!」
風の末裔の一族と通じる子供が欲しければ、『それそのもの』

が目の前に居るではないか。しかも脈は『あり』だろう。
「・・・・・・・!!」
そこまで想い巡らせて、ふと、ある考えに行き着いた。
「あいつ…心の底でそれに気づいて、それで無意識に大人になれないんじゃないのか…」
赤い狼はカー杯急上昇して、頭をブンブン振った。
「俺には関係ねぇ!!」

高原の小さな氏族にとって、王の側女を差し出すというのは、そう悪い事ではない。子供でも出来れば王族と血縁になれるし、万が一上手く転がれば、一気に王族だ。
差し出される本人さえ、それで良ければ…なのだが…。
急ごしらえだったので、輿(こし)一つに長持ち一つで、花嫁一行は陣に入った。陣に輿入れする事自体異例で、『陣中見舞い』の体裁をとっていた。
古い刺繍の施された重い衣装をまとって、小柄な娘は輿から降りた。
崖の上からそれを見護っていた小狼は、草の馬に跨って岩肌を駆け降りた。
「気が進まないけど、王の命令だもんね…」

護衛すべき娘は、王のパオに通され、被り物を降ろした所だ。小狼もそっと御簾をくぐってパオに入った。
黒い髪が腰まで波打つ、飴色の肌に真っ黒な瞳の、十六、七の少女。
「アル・カンシラと申しま…す……」
少女の目は、何故か王を見ないで、入り口の方を凝視している。
「どうしたのかね?」
「あの…ここは、戦の陣中とお聞きしました。どうして、小さな子供がいるのですか…?」

＊＊＊

小狼は二つの事に驚いた。
一つは、この少女に妖精が見えているという事。そしてもう一つは、彼女の物怖じのなさ。
神の子とも称されるモンゴルの覇王の元に召されたのだ。大概の者は目も眩むような緊張で、口を聞くどころか顔も上げられない。
ところがこの娘は、世間話のように素朴な疑問を口にする。いきなり大王に…！　だ。
小狼はむくむくとこの少女に興味が湧いた。

「さあ、何かいるのかい？」
あ、すっトボケる気だな。
少女は真正面から王の顔をじっと見た。くっきりとした横顔に、真っ黒な瞳。白目は青みを帯びていて、本当に綺麗…。
小狼は思わず見惚れた。
「王様もご覧になれていると思いますが…？　その御瞳に映っていますわ、小さな青色の髪の女の子が」
小狼は思わずクスクスと笑ってしまった。モンゴルの覇王が、完全に少女に喰われてしまっている。
少女は今度は小狼に向き直った。
「あ…ごめんなさい。小さな子供だなんて言ってしまったけれど、違うみたい？　何だか私よりお姉さんな感じがする？　不思議だわ？」
今度は小狼がタジタジになる番だった。そんな感じで、アル・カンシラは、小狼の心にするりと入り込んだ。

テムジンは上機嫌だった。積年の心配事が解消したのだ。
「見える父親と見える母親、当然見える子供が生まれて来るよな」
今日は、小狼の森のハンモックは、テムジンが占領していた。

「ただ見えればいいだけ、って訳ではないと思いますよ。イェスゲィ様は、総てを惹き付け、協力しようと思わせる魅力をお持ちだったと聞き及びます」
小狼は木の下に座って縫い物に専念しながら、一応釘を刺した。
「俺は？」
テムジンはうつ伏せに寝転がって、上目遣いに聞いた。
「それなりの魅力はお持ちですわ」
妖精の空色の髪には、珍しく薄桃色の小さな花が飾られていた。
「おーうーさま――！」
同じ花を耳の上に挿した黒髪の少女が、両手の中に何か大事に包んで駆けて来た。
「鳥の雛が落ちていましたの。巣に帰してあげなくては」
「俺が木登りすんの？　しょーがないな…」
「いいえ、王様だと親鳥がびっくりします。私が木に登ります」
少女は小さな靴を脱いで裸足になった。
「じゃあ、俺は？」
「肩車して下さい」
小狼が縫い物をしながら吹き出した。

「この娘は？」
「かなりな魅力をお持ちです」

最初の日、小狼とアル・カンシラは枕を並べて語り明かした。普通に話せる友達を必要としていた小狼と、故郷を離れて不安なアル…、テムジンの心配りだった。

朝、二人は赤い目をして、ニコニコと手を繋いでいた。特に小狼の、ここ最近の額の縦線が、嘘のように消え失せていた。

そして朝食を供にしながら、アルは小狼に促されて告白した。

「私、あの氏族の首長娘という事でしたが、嘘ですの」
「ふーん…」
「……」
「ほら、王はそんな事で怒らないって言ったでしょ。アルを、気に入ったのだから」
「まあ、ね…　じゃあ、何者なの？」
「あの氏族の者ですらありませんわ」

あまりにハキハキ言うので、こちらが、たじろいでしまう。

「私の母は流れ者だったそうです。行き倒れて、命と引き換えに私を産み落として、私は部落の人々に育てて貰ったんだけど、差し出される事に決まった本物の首長娘が前の晩に駆け落ちしてしまって、みんな困り果てていた所に、ご恩返しするなら今だと思って名乗り出たのです」

壮大なストーリーを一気語りしてしまった。テムジンはサジをクルクル回しながら答えた。

「ん～…じゃあそれは聞かなかった事にしよう。それでいいだろ、君の恩人にはお咎めなしだ」

アルはニッコリして礼を述べた。

アルにしたら、夫となる人物に隠し事を持ちたくなかったのだろうが、小狼の目論見(もくろみ)は別の所にあったのだろう。放って置けば、アルと同じ血を持つ娘、皆召し上げるとか言い出しそうだったから…

実際、テムジンは、夕べそれを考えた。小狼に先読みされて、王は、苦虫を噛み潰した様な顔になった。

女ってのは共闘すると厄介なんだよな……。

戦が小康状態なのもあって、アルの陣中見舞いは当初の予定を大きく越していた。

思いも寄らない友達が出来、日々穏やかに過ぎ、小狼はこのまま戦が自然消滅すればいい、とさえ思った。

小狼がアルの乗馬用のズボンを縫い上げた所で、空から赤い

狼が降りてきた。
小狼の後ろで身を堅くするアルを無視してテムジンに歩み寄り、素早く何か耳打ちする。
テムジンの中で何かが切り替わった。
「アル・カンシラ、長らく有り難う。一度部落に戻りなさい。追って本国の後宮から召喚を寄越すから」
アルは即座に状況を悟った。
「はい、王様、お気をつけて…」
「ああ、大丈夫だよ。小狼、アルを部落まで護衛するんだ」
「承知しました」
「そして…、そのままアルの部落に残りなさい。彼女を護衛しながら、今回の戦が収束するまで待機を命ずる」
「…!! どうして?!」
「わかんねぇのか!!」
赤い狼が気炎を吐いた。テムジンがそれを制して言った。
「小狼はもう、戦には出さない」
＊＊＊
小狼(シャオラ)の剣は人は斬れない。だからって、役立たずって訳じゃない。人外の悪いモノを祓うには絶大な力を擁している。
伊達に風の末裔の長の血筋じゃない。形(なり)は子供だが、里を出てからも、剣の修練は欠かしていない。
テムジンの横で、群がる敵兵を薙払うだけの風だって起こせるようになった。
ましてや、今の戦相手には明らかに人外使いがいる。大鴉を使うので鴉将(ウァージャン)と呼んでいるが、本当の名前は分からない。戦を外されるなんて思ってもみなかった。
「出さない…って…? ワタシは駒じゃありません!! 貴方に協力するのは、ワタシの意志です!」
「分かった…、言い方が悪かった。頼む、小狼はもう戦に出ないでくれ」
「答えになっていません!」
アルはおろおろしている。
「噛み砕いてやろうか!!」赤い狼がブチ切れた。
「お前、俺が斬れるか? その剣で俺を祓う事が出来るか? そうするとこいつは自由だぞ! でも出来ないだろう。俺を倒すために念を込める事は、お前には出来ない! そういう奴だから… だからお前は戦場(いくさば)には要らねえ!」
小狼は頭の先から鉄芯を通されたみたいに硬直したが、やがてカクリと肩を落とし、テムジンに一礼し、アルを伴ってその

場を駆け去った。
「……要らん事言ったな、とは言わねえぜ…」
「いや……感謝してるよ…」
テムジンは今まで見た事のない表情で、赤い狼を見つめた。赤い狼はふふん、と目を逸らし、遠くの空を見据えた。
鴉(からす)が…動き出した……。

馬車の御簾の隙間を何度も開いては、アルは草の馬を確認した。ああ…供の者がいなければ、今すぐ駆け寄って小狼を抱きしめてあげたい。
誰からも必要とされない、お前は要らないよって言われる辛さは、アルには身に染みて分かっていた。
通りすがりの流れ者が産み落とした娘だ。部落での扱いもそれなりだった。ましてや他の者に見えないモノを見る、おかしな子…。
そんな生きている価値も分からないような自分でも、一生に一度くらいは人に喜ばれたい。だから、部落の娘皆尻込みした鬼神の花嫁に、自ら名乗り出たのだ。アルにとっても、小狼は生まれて初めて出来た友達だった。
アルの部落まではその日のうちに着けない。

荒野に張られた仮設の天幕の中で、やっと小狼と二人きりになれた。小狼は少し落ち着いていた。
「兄様も言っていました。お前は彼の為に命を投げ出しそうで心配だって。要するに、ワタシってヒトにそう見られる感じなのね。もっと自分だけを守る素振りをしていたら、テムジンは戦に連れて行ってくれただろうに。そしたらあのヒトを護れるのに！」
言っている事が矛盾しまくっている。だけど、アルは、言葉が見つからなかった。自分もそんな小狼に戦場へ行って欲しくない…という本心は言えなかった。

ふいに小狼が顔を上げた。
はたはたと風の音がする。草の馬のただならぬいなきが聞こえた。
小狼が剣を掴んでアルに覆い被さると同時に、ばさあ!!、とパオがめくれて飛ばされた。
十羽ばかりの大鴉が供の兵士を襲っている!!　小狼はヒュッと口笛で草の馬を引き寄せ、馬上にアルを押し上げた。
「何て事!!　こんなに側に来られるまで気付かないなんて!!」
剣を抜いて鴉に立ち向かう。

小狼が腑抜けだった訳じゃない。敵が一枚も二枚も上手だったのだ。鴉将はただ者ではない。いや、とんでもない切れ者だった。モンゴルの鬼神の『本当の弱点』を、的確に突き止めていたのだ。

＊＊＊

相手は身の丈もある大鴉だ。人間の兵士は我を失って、散り散りに逃げてしまった。

「――破邪――!!」

小狼は剣に宣詞(のりと)を吹き込み、大上段から一閃した。鴉達は黒い羽根を飛び散らせ、後退した。

「逃げましょう!」

アルが小狼に馬上に上がるよう促す。小狼は剣先で鴉を威嚇しながら首を振った。

「…駄目、二人乗りじゃ…」

落ち着け…　鴉は十一、十二…十三羽…　体力を温存して確実に一羽づつ倒して行こう。…その前に。

後ろ手で馬の鈴に手を触れて、呪文を唱える。

先日の失態の後、頑張って練習した、彗星の魔法…さあ、アルを安全な所に!

草の馬は風を吸い込み、ビュッと急上昇してくれた。

「ばかぁ!!　そんなんだから、貴方は……」

もう聞こえない。ワタシ、こういうのがイケナイんだな…きっと。

鴉は飛び行く馬に見向きもせず、包囲を縮める。鴉将の判断では、鬼神の本当のアキレス腱は、寵姫ではなく蒼の妖精の方って事か。

「ちょっと、嬉しいかも……」

小狼は、見も知らぬ鴉将にちょっぴりの信愛を込めて、剣を構えた。

先に気付いたのは赤い狼だ。

「何か、おかしかねぇか?」

テムジンも不自然を感じていた。敵が大きく動き、総攻撃を匂わせたが、どうも煮え切らない。

まるで、時を稼いでいるだけみたいだ。

「中途半端なタイミングでちょっとづつ動きやがる。本軍を足止めするためみたいに…?・・・!!」

「……狼…!!　…あの中に…鴉将は…?!!」

「…居やがらねぇ!　鴉は飛んでいるが…薄いな、術者は側に居ない。囮かよ!!　ちぃっ!!」

「頼む、狼…!!」
「何で俺が!」
「頼む……」
「借りはでかいぞ!!」
赤い狼は炎の軌跡を引きながら、アルの部落方面に飛び立った。

「あと、三羽…」さすがに息が上がってきた。
「…もつかな…」
小狼の剣は呪符を炊き上げて鍛えた物だが、こんなに続けざまに斬った事はない。さっきから、軋んで悲鳴を上げている。三羽の鴉は大きく舞い上がり、上と左右から同時に襲って来た。
「――破邪!!――」
渾身の呪文が炸裂し、剣からの衝撃波で鴉は砕け散った……
…が、剣もボロボロと崩れてしまった。
「マズイよね…」
さっきから目の前に、いかにも…な、黒雲があるのだ。
すう…と、黒雲が目の前に迫ったかと思うと、左右に割れて二匹の虎になった。白い虎と黒い虎の間に人影が姿を現した。
「鴉将(ウァージャン)…」

人影がはっきり見えるにつれ、小狼は背筋が粟立った。人間だ…、人間には違いない……でも…
「そんなに恐ろし気な顔をするな…。ちと色々なモノと契約を交わし過ぎてな…」
おどろおどろしい雲の中に現れたのは、人間の陰陽師の出で立ちはしていた。しかし、そのオーラは人の物ではなく、強力な妖力が顔に恐ろしい隈取りとなって浮き出ていた。
剣は無くした。後は風の呪文で立ち向かうしかないか。かなり無理っぽいけど。まあアルは護れたから、テムジン怒らないよね。
二匹の虎が熱い息を吐きながら、一歩づつにじり寄る
「やめてええ――!!」
アルが草の馬を駆って、小狼の前に割り込んだ。
どうして草の馬がアルの言う事を聞くの?! そんな疑問も吹き飛ぶアルの言葉に、小狼は凍り付いた。
「蒼の妖精には危害を加えないって言ったじゃない!! 誰も血を流さないで戦を丸く終わらせるって言ったから、協力したのよ!! 墨将(メィジャン)様!!」
＊＊＊
赤い狼が見つけたのは、破壊された野営の跡と、飛散した黒

い羽根…砕けた剣……。
「何てこった…」
すぐに戻ってテムジンに…と、飛び立ちかけて、狼は止まった。
知らせてどうなる？　側女はともかく、小狼が敵の手に堕ちたと知ったら、あの唐変木は何をトチ狂うか分からない。
「だからとっとと里に帰しちまうべきだったんだ」
独りゴチる狼の目に飛び込んだのは、紅い血に染まったトルコ石の玉だった。
「あの娘がしていた首飾りか…」
見ると、数十丈おきに、ポチポチと落ちている。
「…連れ去られた方向位は分かるか……ふん！」
赤い狼は、鼻から大きく息を吐き、紅い玉を辿りながら、空中を駆け出した。

小狼はそこそこの部屋に入れられていた。しかし、入り口には結界が張られ、その前には二匹の虎が鎮座している。
ここは戦場の砦の一つ。石造りの古い城跡、墨将の拠地。
入り口外の壁に、うつむいた少女が、長い黒髪に顔を隠して、もたれ掛かっている。
「王様の側女に名乗りを上げたその夜、あの人が来たの……」
小狼は椅子にもベッドにも触れず、入り口に背を向けて、石の床に座り込んでいた。
「戦を終わらせる為に協力しろって。私…、もう戦が嫌だった。部落の男の人、大勢徴兵されて、誰も戻らなかった。皆が泣いて、毎日怖くて…早く安心して暮らしたかった。最初、王様の命を捕れって言われていたの。でも、とても出来なかった。あんなにいい人だとは思わなかったんだもん…」
アルは苦しそうだった。顔色も真っ青だ。
「最初の夜…王様と一緒じゃなくて、本当に、本当に、よかった…」
小狼は能天気な自分を恥じた。アル達の国を侵略に来たのだ。恨まれるのは当たり前だ。アルを咎めるのは筋違いだ。
でも……心にぽっかり穴が空いてしまったみたい…。
「だから、間者鴉にはっきり伝えたの。王様を殺める事は出来ません、気に入らないなら私の命を捕って下さいって。本当よ。そしたらね、もういいって。貴方の情報を得たから、もういいって。貴方の身柄を利用すれば、交渉で戦を終える事が出来る。王様も、誰も血を流さなくて済むって。」
うまい事言うな……　小狼は床を見つめた。戦に脅かされる

アルのような立場の弱い者には効くだろう。
「あんな……人だったなんて……」
あの時、間に入ったアルを無視して、二匹の虎が小狼に飛びかかった。
アルは草の馬を飛び降りて、小狼の方に押し出した。間一髪、小狼は草の馬のたてがみに掴まって上空へ逃げる事が出来た。
次の瞬間…！　虎は両側からアルの首に爪を突き立てた。
墨将は小狼を見て、静かに笑っていた。
小狼は草の馬をゆっくりと下降させた…。

アルの首は白い包帯が巻かれていたが、襟元には血の染みが付いたままだった。虎の爪痕の痛みよりも、友達の微動だにしない背中の方が、彼女には辛い事だった。
「ごめ……ごめんなさい……」
小狼は石の床の上で拳を握りしめていた。謝って欲しくなかった。アルをこんな目に合わせたのは自分だ。友達になんかなれる訳、なかったんだ。
虎達が居住まいを正した。墨将が嫌な笑みを浮かべながら、入り口の結界の前に、滑るように歩いてきた。
「如何(いかが)かな？　我が砦の居心地は？　モンゴルの蒼い妖精殿」
「……」
「貴方がこの手の中にあるのは夢のようです。あのモンゴルの鬼神の泣き所だ。どんな要求でも飲んでくれそうですねぇ」
「……アル・カンシラはもう要らないでしょう、解き放ちなさい」
アルは顔を上げた。小狼の所からは表情は見えない。
「……無理ですね」
墨将は虎に目配せした。白い方の虎が、アルを押しやって歩かせた。
「この娘は余計な物を二つ持って来てしまった。一つは蒼い妖精に対する情。もう一つは・・・鬼神の血だ!!」
アルは雷に撃たれたようにびくっとした。
「私の眼が誤魔化せると思ったか？　お前には命が二つ見えているんだよ」
小狼は動揺を隠せず振り向いた。
「アル…!!」
「すぐにはどうこうしませんよ。いざとなったら、これも交渉の道具になる」
墨将は、白い虎に押されたアルと共に立ち去った。

何とか…何とかしなくちゃ…。小狼は立ち上がりかけた……と、不意に耳元で声がした。
「落ち着けよ、どチビ！」
＊＊＊
小狼(シャオラ)は辺りを見回した。
「うろたえるな、あいつが見ている」
残った黒い虎が、結界の向こうから不審げに覗き込んでいる。
小狼は虎に背を向け、ベッドの方に歩いた。そしていきなりベッドに突っ伏した。
「うああぁぁぁ〜〜んんっ!!」
黒虎はやれやれ…といった感じで、入り口から離れてそっぽを向いた。
「どこ…？」
小狼は、枕に顔を埋めたまま、小声で聞いた。
「俺様が分身を作れるのは知っているだろ。本体は屋根の上」
耳に手をやると、温かい硬い毛が数本、指に触れた。
「まったく…ざまぁねえぜ、蒼の妖精さんよ」
「赤い狼…お願い!!」
「ああ、分かった分かった。お前さんを人質に取られたらあの甘ちゃんは腑抜けだ。そうなれば俺だってつまらんからな」

「違うの！　お願い！　アルを助けて…!!」
「はあぁ?!　何考えてんだ?!、あいつはスパイだったんだろが!!　噛み砕いてやってもいい位だぜ!!」
「だって…・・ううん、お願い！　とにかくお願い!!　ワタシは殺されないけれど、アルは絶対、生かしておかれない。だから助けて!!　…お願い!!」
「いい加減にしろ!!」
　赤い狼が声を荒げたので、黒虎が首を上げた。
「うあああぁ～んっっ、…ひっく…ひっく…」
　虎はまた首を床に着けて寝そべった。
「狼、お願いよ。ワタシ、貴方の言う事、何でも聞く。家来になってもいい。消えろと言うなら、テムジンの前からも姿を消す」
「……」
　姿は見えないけれど、赤い狼がためらっているのが分かった。
「なあ、お前、考えて物事を言ってんのか?　昨日今日出逢った娘がそんなに大事なんか?　テムジンよりも?」
「テムジンは大事よ。比べる物なんてない。でも、テムジンは貴方がいればいいんでしょ。ワタシは要らないじゃない。それならワタシは消えるから。そしたらもう、こんな迷惑もかけないから。だから、おねがい…」
「面倒くさい奴らだぜ…」
　こいつといい、テムジンといい……。
「分かったよ…　だが、機会(チャンス)は一度だ。あいつを助けたら騒ぎを起こすから、お前はその隙に自力で脱出しろ。草の馬はこの建物の地下に繋がれている」
「うん、分かった」
　赤い狼の毛はふうっと小狼の側から離れて、壁の隙間に消えようとした。
「狼……ありが……」
「言うな!!　俺様は、お前に礼を言われるのが、大っ嫌いなんだ!!」

　程なくして、上の階で大きな破壊音がして、建物全体が震えた。
「派手ね…」
　小狼は呟いて立ち上がった。赤い狼が来てくれただけで、何だか凄く冷静になれた自分がいる。
　入口の方を向く。黒虎が、結界の向こう側から、睨みながら近寄って来た。

「なんの騒ぎかしらね、虎さん？」
また破裂音がして、黒虎が顔を上に向けた。今だ…!!
素早く呪文を唱えて、結界の手前に渦巻きを作り出した。油断していた虎は、真空に引っ張っぱられ、一回転して結界に激突した。
結界は虎を弾き飛ばそうとするが、渦巻きは虎を引っ張る。虎は苦痛で滅茶苦茶に暴れて、入り口周囲の壁を破壊してしまった。石造りの壁が砕け、支えのなくなった結界が急激に収縮して、黒虎を呑み込む。
虎は宙を一掻きして結界と共に消え、後には下の階まで貫く大穴が開いていた。
「やるじゃん…ワタシ…」
そのまま大穴に飛び降りた。
＊＊＊
砦の塔の屋根の上。赤い大きなケダモノが、黒髪の少女をくわえてぶら下げている。
「た…助けて…助けてえ……!!」
城壁から見上げるのは墨将(メィジャン)。
「駄目だ、そいつはテムジンの所の戦神(いくさがみ)だ。怒りを買ったな、諦めろ」
「いやあああぁ――!!」
赤い狼は、いきなりアルが監禁されている部屋を破壊して、何も言わずに彼女をくわえて屋根に跳んだのだ。
タダで助けてやるもんか、ちょっとぐらい反省しろ…。
「狼さん…」アルが小さな声で囁く。
「有り難う…」
ちっ！　分かってやがったか。
「大した演技力だな、それでテムジンや小狼も手玉に取ったのか？」
赤い狼は、アルをくわえたまま、口の中で毒づいた。
「…本気で楽しかったのよ。人生で唯一、楽しかったの。信じてくれなくてもいいけれど、墨将様の命令を反故にして、処せられてもいいと思った…」
「どチビの誘拐の手引きはしたんだろ」
「はい…言い訳しません。だから、お願い、私はうっちゃって置いて、小狼を助けて！　お願い！」
またかよ!!　赤い狼は自分でも血管が二、三本ブチ切れるのが分かった。
「てめえら！　これ以上俺様に『お願い』するんじゃねぇ!!　俺様はそんなに『いいヒト』じゃねぇえ――!!」

思わず口が開いてしまった。アルの体が屋根に転がり落ちた。
「きゃ……」
――ガシッ!!
屋根の縁で危うく捕まえた。
「アブねえ～……あ…」
墨将が怒りに指を震わせて見上げている。
「茶番かあ～～！　謀(たばか)りおって～～!!　行け!!」
墨将の影から白虎が飛び出した。
「ふん、俺様が娘をかばって自由に闘えない、とでも思ったか？生憎だったな！」
赤い狼はアルを捕まえていた前足を躊躇(ちゅうちょ)なく離して、白虎に飛びかかった。
「きゃあぁー!!」
アルは屋根の縁から落ちた。次の瞬間、蒼の妖精の駆る草の馬が、屋根の下から現れた。首にアルを引っ掛けて。

小狼は屋根に降り立った。
「赤い狼、ちょっとだけ時間稼いで」
「ヒト使いが荒過ぎるぞ!!」
赤い狼は、白虎とガッツリ四つに組みながら、墨将の方へ跳んだ。墨将が転がり避けた跡に、二頭の戦神が絡まって激突する。
「小狼…　わた、わたし……」
「急ぐから、ワタシの話だけを聞いて。部落に帰っては駄目。モンゴルの後宮も駄目。うんと北…、蒼の一族の里を目指して！この馬が場所を知っているわ。そこだと、・・戦はないから！」
里を出てから、一族には極力迷惑をかけないようにやって来た。でも…アルを、争いの柵(しがらみ)から護って貰えるのは…兄様しかいない。
「小狼…」
アルに何を言う暇も与えないで、小狼は金の鈴に命令した。草の馬は、振り向いて何か叫ぶアルを乗せて、矢のように飛び去った。
鴉が一斉に飛び立ったけれど、彗星の呪文の効いた馬は、あっと言う間に見えなくなった。

「もういいのかよ」
赤い狼が、白虎の破片をぺっと吐き出しながら、隣に来た。
城壁では怒りの形相の墨将が、次々と怪しげなモノを召喚している。

「さて…」
小狼は、屋根の上で、赤い狼と背中合わせで剣を構えた。どこで調達したのか、数本の細剣を背負っている。
「用意がイイな」
「貴方と共に闘えるの、最期だろうから……最期ぐらいビシッとしなきゃ」
「へっ…もう泣きゴト言うなよ。…来るぞ!!」
＊＊＊
墨将の放った魑魅魍魎(ちみもうりょう)が空に舞い上がり、二人を囲んでまさに襲いかかろうとしていた。
しかし赤い狼は、背後の気配の方に、背筋がざわわっとした。
「なんだ?」
後で小狼が宣詞を唱えている。剣が妖力を含んで、ビリビリ震えている。
「お…おい?」
弾けそうに妖力を含んだ剣が、小さい妖精によって掲げられ・・・思いっきり振り下ろされた!
三尺花火みたいに破邪の光が飛び散り、魑魅魍魎も鴉も一気に吹っ飛んだ。
「ふう……??　あれ?　赤い狼?」
赤い狼は間一髪、屋根の反対側に張り付いて難を逃れていた。
「阿呆ぉお〜〜!!　俺まで祓う気かあぁあ〜〜!!」
「ご…ごめん…」
何なんだ?　こいつこんなにパワーあったっけ?
「あ……」
剣にビシリとヒビが入り、ホロホロと崩れてしまった。
「ああ、やっぱり、その辺に転がっていたチャッちい剣じゃ、もたないわね。大丈夫よ、次はちょっとセーブする」
ドチビの小狼は、弁慶のように背負った剣の一本を引き抜きながら、笑った。
「……」
赤い狼だって、小狼をまったくの無能物だとは思ってはいなかった。甘さと優しさが大き過ぎて、枷(かせ)になっているんだと。
しかし、枷が外れたとしても、このパワーは桁が違い過ぎる。一体、何がどうしちまったんだ…?
「…俺の背中に乗れ」
「いいの?」
「離れて闘って、流れ弾に当たっちゃ堪らん。ほら、奴さん、パワーアップしたぞ」

墨将が、もはや人の声じゃない声で呪文を唱えながら、むくむくと妖気を集めている。
「ラスボス最終形態ってトコか?」
一瞬呪文が止まって、次の瞬間、ジュジュジュ、ジュッ・・っと、空一杯に墨を流したように、黒い影となって広がった。空全体がうねり、波となって二人に襲いかかって来た。
「振り落とされるなよ!!」
赤い狼は小狼を乗せて、塔の屋根からジャンプした。直後、うねりが屋根を粉砕する。
黒いうねりを掻い潜って、その向こうに二つの光が見えた。
「やつの目だ」
小狼は左手の逆手で水平に剣を持ち、右手の平を柄尻に添えた。狼に当たらないように、術力は剣先に集中する。
狼は加速した。無数のうねりが飛んで来るが、彼の炎がすべてを焼き尽くす。二つの光が脅えの表情をした。
「――人がそこまで力を持ってはいけない!!」
赤い狼は耳を疑った。小狼の声じゃない?!!
いや、子供の妖精の声じゃない……。
破邪の光が二つの目の間を貫き、墨将の苦しげな呻きが空一杯に広がった。
静寂と共に、全ての邪が嘘の様にかき消えた。
遠くの山に一条の陽が射し、朝焼けの中に赤い狼が浮かんでいた。
「ああん、また剣が折れちゃった」
赤い狼が振り向くと……子供の妖精が、背中にいた。さっきのは……気の迷いか?
急に周りの音が耳に入り出した。地面の上でいつの間にか、人間の騎馬隊が砦に雪崩れ込んでいる。
「おい、白馬の王子様のお出ましだぞ…」

＊＊＊

テムジンはさすがにモンゴルの覇王だ。やる時ゃやる。
人外達の補佐がなくとも、一夜で敵本陣を制圧し、鴉使いの居場所にたどり着いたのだ。もっともかなりな本気モードで無茶をやった。付き合わされた兵士はへろへろだ。
「テムジン…」
小狼は騎馬群の先頭に立って、砦に切り込む必死のテムジンを見止めた。丸一日しか離れていなかったのに、物凄く懐かしく感じる。
「…行こうぜ、戦は収束って事だ。命令違反にはならんぞ」
しかし小狼は、赤い狼の背から離れ、破壊された尖塔の瓦礫

の先端に、すっと立った。
「……おい?…」
「…約束だから。アルを助けて貰う代わりに、テムジンの前から消えるって」
また出たよ、この意地っ張りが…！
「俺はそんな事、ひとっ言も言っていないぞ。お前がいなくなっても、俺には何の得にもならん。むしろ面倒くさい雑用が増えるだけだ」
小狼はまだ納得いかない風で、そこから動かない。
「じゃあ、望みを言って。テムジンが来る前に。何でも言う事を聞くって言ったよ」
ほんっとに面倒くさい奴だ…!! 望みは…無い事もない……だが……
「お前さんにゃ無理だ」
「何? 言ってみてよ。ワタシにだって、出来るかもしれないじゃない?」
「そうさな、お前にしか出来ない。だけど、お前には出来ない」
「何、それ?! 家来になるって言ったじゃない。ワタシに出来る事なら、やる!!」
「本当か…」
「うん！」
赤い狼は、小狼と同じ高さの空間にすうっと降りて来て、その目をまっすぐ見ながら言った。
「俺を、祓え…!!」
「えええっ!!」
「勿論ただでは祓わせない。俺も全力でお前の命を取りに行く。つまり、俺と、本気で、闘え…って事だ…!!」
最後の方の言葉は、高揚して我を忘れた感じだった。
そう、戦神にとって、一生の内に出逢えるかどうかの『全力で闘ってみたい相手』に、今まさに出逢えたのだ。
狼とて、今ここで妖精と命のやりとりをする無意味さ位、分かっている。だけど、戦の中に生まれた狼は、闘うことでしか己を保てない。テムジンが来る前に、ケジメを着けて置きたい…!!
小狼は一瞬戸惑ったが、狼の目を見てゆっくり応えた。
「赤い狼さ、前、言ったよね、俺を倒せるか? って。容赦無く倒せるようじゃなきゃ、テムジンとは居られないって… そういう事?」
「…そうだな、俺を倒せばテムジンは自由になる。戦をし続け

なくていい。そういう理由で構わんよ」
「わかった……」
小狼は剣を抜いた。
赤い狼は小狼と距離を保った。
兄貴の蒼の長は、強い…、とは思ったが、背筋がざわつくような事はなかった。こいつの一閃毎の力の上がり方は半端じゃねぇ!!
小狼は剣を斜めに構え、目を閉じて静かに宣詞を唱えだした。赤い狼の炎が、渦巻いて燃え上がった。

塔の下で戦(いくさ)している人間達は、勘の良い者も悪い者も、上空のただならぬ気配に鳥肌を立てた。
テムジンは必死で塔を駆け上がった。もう人間の敵兵なんかに構っている場合じゃない。よく分からないけど、上で間違いなく、取り返しのつかくなる事が起きている…!!

小狼の剣が、今までで最高の力を吹き込まれ、蒼く輝いた。狼の炎も闘牙を上げて、赤から白に変わる。
二つの光が空で交わった。光の中で赤い狼は気付いた。
狼は、妖精が大きくなれないのは、無意識にテムジンとお子様関係を続けていたいから…と思っていた。
だが、どうやら間違っていたらしい。
小狼を子供のままにして置きたかったのは…、自分の手の中に折り畳んで収めて置きたかったのは…、テムジンだ!!。
テムジンを離れて、越えて、初めてこいつは大人になれるんだ…!!
狼が一瞬垣間見たのは、透明な細い翼を持った、蒼い髪の凛々とした天使だった。
しかし、蒼い輝きは一瞬でしぼんだ。すぐに赤い炎の力が勝り、蒼い光は凌駕され、狼の牙が天使の喉元に届いた。
「・・・・!!」
二つの光が同時に消えた。
小狼の剣はだらりと下ろされ、完全に輝きを失していた。
赤い狼は、子供の妖精の喉笛に牙を掛けかけて、止まっている。
「ぐ……」
狼の喉から呻きが洩れる。なんでこの牙に力が入らないんだ! ——俺は——?!!
小狼は静かに眼を開けた。そしてするりと狼から離れて、剣を鞘に収めた。

「おあいこね……狼だってワタシを倒せないくせに」
赤い狼は、顎が外れそうになりながら、激怒した。
「本気で来なかったのか?!　俺様を試したのか?!　…そんな事でこの俺が…!!」
小狼が城壁に降り立ちながら振り向いた。
「ううん、そんな怖い事、出来る訳ないでしょ。本気だったわよ、目一杯。姿を見たら躊躇しそうだから、目を閉じて跳んだの。でも貴方の匂いを感じただけで、剣の力が消えてしまった。貴方がその気なら、ワタシはそれまでだった」
「……」
＊＊＊
群がる鴉の残党を薙ぎ払いながら、テムジンが城壁の上に駆け込んで来た。
「小狼(シャオラ)――――!!　狼っ……!!」
二人はふさりと王の両側に降り立った。
「意外と早かったな、テムジン」
「ご心配をお掛けしました、王」
テムジンは子供のような心細い顔で、二人を見比べた。
「アルは…?」
「死にました」
狼があんぐり大口を開いて妖精を見やる。
「死んだと思ってください。二度と王の前に姿を現しません」
「なんで…」
「もうこんな酷い目に遭いたくないって思うのは、普通の女の子の当たり前の反応だわ…」
小狼は、ポケットに残った血染めのトルコ石を王に渡した。
「アルの事は忘れてあげて下さい、護衛しきれなくて申し訳ありませんでした」
小狼はテムジン越しに赤い狼も見た。
ちっ分かったよ…　あの娘の正体はテムジンには言うまい…
「アル…俺が迂闊だったせいで……」
「なあ、テムジンよぉ」
うなだれてしまったテムジンに、狼が柄にもなく声をかけた。
「お前さんは何も失っちゃいない、小狼がいて、俺もいる。最初の通りだ。それで良し、じゃないか?」
危うく両方失う所だったんだぞ…　狼は口の中だけで呟いた。
そう…どちらが勝ち残っても、恐らくテムジンの元には戻らなかっただろう…

戦が収束と言っても、一つの陣を越えて先に進めただけだ。墨将の砦をそのまま本陣とし、後は机上の交渉か、更に進むか…　そこん所は人間任せで、その他の者は羽伸ばしだ。

何で俺だけ…?と、面倒くさい駆け引きに忙殺されながらも、テムジンは相棒達に大きな変化を感じていた。

赤い狼は、あれほど鬱陶しがっていた小狼(シャオラ)と、普通に会話をするようになった。『どチビ』とも呼ばなくなったし、それどころかたまに冗談召かして『蒼の狼さんよぉ…』とか呼んだりする。

小狼は小狼で、以前は事ある毎に拗ねてよそよそしくなった物だが、今は往々にして落ち着いて穏やかだ。

何だか置いてけぼりを食った気分だ。

だから二人が小狼の部屋で話をしていた時、…いつもは絶対そんな事しないのに…つい足を止めて聞き入ってしまった。

小狼は捕らわれていた部屋をそのまま寝室にしていた。床は板を渡したが、壁は穴が開いたままなので、声は丸聞こえだ。

「蒼の妖精ってさぁ、成長の早さがマチマチなのは分かるけれど、成長した姿も違ったりするんか?」

「んー?　髪の色とか濃くならない子もいるよ。あと使える術とか、血によって…」

「そうじゃなくて、もっとビジュアル的に…例えばだ、羽根が生えるとか…」

「羽根ェ…?　ふふふ…」

(やっぱり、目の迷いだったか?)

「そういうご先祖がいたって話はあるわ。でもお伽噺のレベルよ」

「……」

二人の会話が他愛もなさそうだったので、テムジンも中に入ろうとした。

「お前さ…大人になりたいか?」

唐突な話題にテムジンは足を止めた。

「なりたいわよ、どうして?」

「成長を止めている枷(かせ)になっているモノは、見当が付くぞ、外し方は分からんが…」

「本当〜?」

テムジンも思わず身を乗り出した。自分だって知りたかった事だ。

その気配で、さすがに赤い狼は　壁の向こうのテムジンに気付いた。まったく…立ち聞きかよぉ?!　王様っ!!

ここで本当の事…『テムジンが大人になった小狼と向き合うのを怖がっているから』…なんて言った日にゃあ、意識し過ぎて、また話がややこしくなっちまう。小狼は目をキラキラさせて身を乗り出しているし…　さて、どうした物か…？

「お前、とっとと嫁に行け」

「はあぁ～？？　何、それ？」

「要するにだ、お前は色気が足りん!!」

「だから悩んでいるんじゃない！　はあ…、期待して損した…」

「婚約でいいんだよ。約束を交わす…そういう事実で、何かは変わるもんだ」

「訳分かんないわ。約束してくれる人なんて、いる訳ないでしょ、こんなチビッ子」

「そう悲観するモノでもないぞ。俺様の勘だと、お前さん、なかなかの美形(しゃん)になる」

「・・嘘ぉ……」

「本当だって、何だったら、俺様が貰ってやってもいいぐらいだぜ？」

これは120％冗談だ。しかし赤い狼は、小狼にこの手の冗談が、120％通用しない事を忘れていた。

ただならぬ気配に顔を上げると、真っ赤になった小狼が、目を真ん丸にして、座布団を抱き締めている。

いや、ここは、馬鹿ぁ!!、とか言って何か飛んで来るトコロなんですが…

「いや、冗談だって!!　分かるだろ、冗談・・!!」

壁の向こうでテムジンが、ズズズズ…ドサリと、ヘタリ込む気配にすら気付かないで、本気でドギマギしている蒼の妖精に、これまた焦りまくって言い訳する自分…　何でこんな事になるんだあぁぁ～～～？!!

＊＊＊

結果オーライという言葉がある。読んで字の如くだ。

小狼のドギマギは困り物だったが、テムジンに、この妖精と真剣に向き合わせるには、いいショック療法だったのかもしれない。

赤い狼は、テンパった小狼にバケツごと水をぶっかけられたり、不自然に避けられたり、柱の陰から見詰められたり、この世の物とは思えない料理を食べさせられそうになったりしたが、取りあえず我慢した。

別に自分に対してどうこうではなく、いわゆる『恋に恋している状態』だというのが分かっていたから、まあ放っておいてやった。

やっと子供の領域を抜け出したって事だ。それを眺めているテムジンの方が切実だった。

「自分で撒いた種だ、全盛期の小狼の悩みの半分位は味わえ」

そんなこんなで、ここ何ヵ月かで小狼の背が少しは伸び、、顔もほっそり、大人っぽくなったような気がする。

まあ、良い事だろう。何年も子供でいる事の方が弊害があった。もう少し成長したら、あの蒼い天使の姿になるんだろうか？残念ながら自分はそれを見る事は出来ないな……

近頃の狼は、生まれ持った物をほとんど無くしてしまっている。憎しみ、闘争心、欲望を煽る本能…それらを失う代わりに得た物の方を、大切に感じる自分がいる。

思えば、テムジンに、小狼に、初めて逢ったその時に、もうそれは貰っていたのかもしれない。

だが、戦の憎しみから生まれた狼は、それでは存在が危うくなる。あの時、小狼に牙を掛ける事が出来なかった時点で、それは決定的になった。ここにいては力を無くし、いつか消えてしまう。

テムジンにもう戦神は要らないだろう。小狼で充分役に立つ。潮時だ……。

城壁に立ち、口の中であばよ…と呟いて、旅発とうとした時、夕空の中に何か見えた。

「小狼…!!　お前の馬が戻って来たぞ!!」

小狼は久しぶりの愛馬に駆け寄り頬擦りした。そして、丁寧に補修された馬具を撫でて、兄の心使いに感謝した。

テムジンも城壁に上がってきた。

馬はアルを乗せてどこかへ行ったんだとは思っていたが、小狼が語らないんなら、何も聞かないつもりだった。

「おかえり、久しぶりだな」

テムジンも草の馬の鼻面を撫でた。

ふと見ると、小狼が、鈴にくくり付けられた手紙をほどいて、凝視している。

「小狼…？」

「ん…？　あ、アル、元気だって、テムジンによろしくって」

「そう、よかった…」

小狼は手紙をポケットにしまい、二人にそっぽを向いて、馬にひらりと跨がった。

「久し振りにちょっと走って来る！」

「おい、馬を休ませてあげなよ」

「ちょっとだけ…」
小狼は、あっと言う間に空に滑り出した。
狼は、出発を少し遅らせる事にした。チラと見えた手紙は、人間の文字とは違っていた。蒼の長の書いた物だろう。あの娘が健在なら、小狼への手紙は自分で書くだろう。
……影の虎の爪を受けてしまっていたからな……
あの強情っ張りは…今頃、空の真ん中で一人、泣いているんだろう。帰った時、俺までいなくなっていたら……まあ、かわいそうだ……。
＊＊＊
ちょっとだけと言いつつ、小狼が帰ったのは、夜更けだった。二人と顔を合わさないで、疲れたから寝るね…と、そそくさと壁の穴をくぐって、自室に下がってしまった。
――それは本当にたまたまで、赤い狼といえど、予測していた事ではない――
音もなく…本当に音もなく、壁の穴の空間に、黒虎が出現した。
「アオイヨウセイ……アオイ……」
異次元に飛ばされた虎が、蒼い妖精への怨みの執念で、時を経た空間を繋げて、今ここに出現したのだ。
「俺様はスルーかよ!!」
赤い狼が、疾風のように黒虎に飛び掛かった。
虎は、狼に掴みかかり、牙を立てたが、狼は構わず、虎を出現した異空間に押し返した。
「泣き疲れてやっと眠ったんだ。寝かせておいてやってくれ」
戦神(いくさがみ)はチラと振り向き、ベッドの妖精が目を覚ましていないのを確認した。
相変わらず無防備な奴だ…もう俺は、護ってやれんぞ……。
そして、満足げに口の端を少し上げて、虎と共に異空間に消えた。
「礼を言われるのは大っ嫌いなんだ……」
＊＊＊
大国からの使者を城壁から見送りながら、小狼は草の馬のたてがみを編んでいた。
テムジンがやれやれ顔で、肩を回しながらやって来た。
「しばらく実戦はしなくてよさそうだ。まだ先は長いし、じっくり行くさ。一度、本国に帰る余裕が出来そうだよ」
「殿のご家族もお喜びになりましょう」
「…小狼もさ、たまには蒼の長に逢いに行ったら？　あのヒト

絶対、心配症の意地っ張りだから」
「え…？　ふふふ、そうかも…」
テムジンも、小狼の傾向と扱いに慣れてきた。言葉遣いが他人行儀になる時は、無理に突っ掛からないで、小狼の気持ちをほんのちょっと鑑みてやればいいだけだったんだ。それだけで小狼は、昔のように普通に話してくれる。
こんな簡単な事、何で出来なかったんだろ…？
「テムジンは、兄様の事がよく分かっているのね」
「多分、似ているのさ、俺と…色んな所がさ」
小狼は馬の首筋を掻いてやりながら、彼方を見やった。
「じゃあ、赤い狼の事も、心配してる？　突然いなくなって」
「まあね…でも、以前程は、心配していない」
「以前？　いつ？」
「墨将を倒した後ぐらい。ゆったりのどかで、俺達、仲良くて楽しくてさ。でも、そういうのって、あいつには良くない事かも…って心配だった」
「……」
「だから、ここを離れて、あいつに『いい』環境の所に行ったんだろう…と思って、心配よりは安心してる」
小狼はたてがみを編み終え、その裾に赤い毛を混ぜた房飾りを付けた。テムジンの方を振り向いてニッコリうなずく蒼い髪にも、お揃いの赤い髪飾りが揺れている。
「また…どこかで逢えるよね…」
遠くの山の稜線スレスレに、夕陽を透かして低い雲が重なっている。朱に染まる雲を縫いながら、赤い狼が駆けているような気がした。

～　エピローグ　～

草原を夕の風が渡っている。
蒼の長は、風を紡ぎながら、草の馬で空を静かに歩んでいた。手の中に大切なこわれものを抱えていたので。
数ヵ月前……。何年も音沙汰のなかった妹に与えた鈴を付けた馬が、草原の端に現れたとの報告を受けた。
馬の背には身重の女性が…と聞いて、長は兄としてストレートに、卒倒しそうになった。
しかし、馬の背にいたのは、ぼろぼろに疲れきった人間の女性だった。女性は何も…名前すら語らなかった。
ただ、馬の持ち主の安否を訪ねられた時だけ、息災です…、と答えた。

首の傷が何かの呪いかいつまでも治らないで、それが祟って、月の早い子をやっと産み落とすと、呆気なく息を引き取ってしまった。
「お母さんもこんなに私を愛してくれていたのね…」
それが最後の言葉だった。
事情は全然分からないが、妹が何らかの意思で自分に託した母子であるのは、間違いないだろう。
「長、人の子供は、蒼の里で育てるには、障りがありましょう」
「そうですね……。宛がひとつあります。強く優しい人間の所に…」

地上に目当てのパオが見え、柔らかい笑い声が聞こえた時、長は今一度、静かな風を受けて眠る赤子を見た。
妹はどういう経緯でこの母子を寄越したのだろう…？
この子の母親が、薄くではあるが、何代か前に、風の妖精の血を受け継いでいた事は、知っていたのだろうか？　母親もその親も、人間の間では生きにくかったに違いない。
この子供は、私が必ず守護しよう。成長したら、どちらの資質が色濃く出るか分からない。その時も迷わぬよう、導いてあげよう。

何もしてやれない妹への手向けだ。あの子はここを出てから、極力一族に関わらないようにしていた。モンゴルを出てからは噂すら届かない。
草の柔らかい所を選んで赤子を降ろし、風で人間に呼び掛けた。パオから出て来た人間は、赤子を見て驚いたが、すぐに抱き上げ、暖かな家に運び入れた。
「お頼みしましたよ。まったく、あの子も、便りのひとつ位寄越したってバチはあたらないのにねぇ」
いつまで経っても気苦労の絶えない蒼の長は、独りしんと呟いて、宵の星が一つ二つ煌めく空の方へ手綱を翻した。

～おしまい～

二〇〇九・六・二九

ね・ね！
まんじゅう食う？
まんじゅう？！
むすっ
ほーら
はんぶんこっ
大きい方あげて機嫌をとろう…
。。。見〜て。。。。
テムジンよぉ
戦場で迷いは禁物だぜぇ…
うん…そう思う…